2020年7月９日

資料４

第24期日本学術会議
若手アカデミー活動報告
(2019.10-2020.6)

作成：第24期日本学術会議若手アカデミー

各分科会の活動概要

分科会名称	審議内容、成果など
運営分科会	今後の活動の方向性について議論。
若手による学術の未来検討分科会	**学会活動の実態に関する調査（学会名鑑調査）に関する分析（委員による論文の執筆・出版）を行った（資料①）。**その他、学術の将来に関する議論の準備を継続して行っている。
若手科学者ネットワーク分科会	2019年度内に開催予定であった若手科学者サミットについて企画を保留中。若手のネットワークをさらに広げることについても議論をしている。
イノベーションに向けた社会連携分科会	**シチズンサイエンスに関連する提言案を提出した（資料②）。**地方での議論の活性化に向けたイベントの準備と現時点での総括を行った(**資料③「学術の動向」8月号に特集を掲載予定)**。
国際分科会	筑波会議の運営、及び、WSFサイドイベントの実施（資料④**「学術の動向」4月号に特集を掲載**）、大学国際化に関するワークショップ開催（資料③-1）、GYA関連の活動（資料④-4; 2021年の総会兼学会の日本開催の準備）、外務省との意見交換。

日本における学術研究団体（学会）の現状

埴淵・川口(2020) E-journal GEO
日本地理学会が発行する査読付学術誌

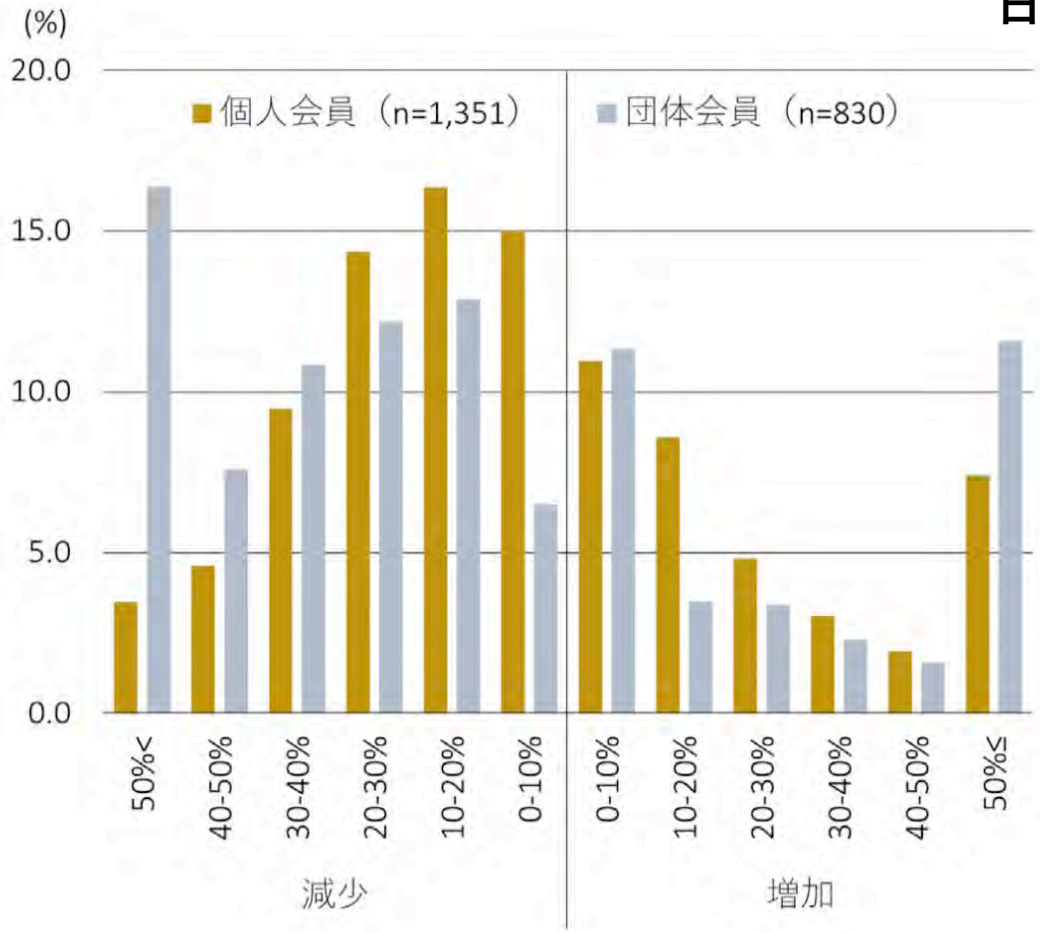


図2　個人・団体会員数の増減率の分布

Fig. 2　Distribution of percent changes in individual and group memberships

注：縦軸は集計対象となった学会全体に占める割合（%）を表す

過去10年間での
各会における会員数の増減

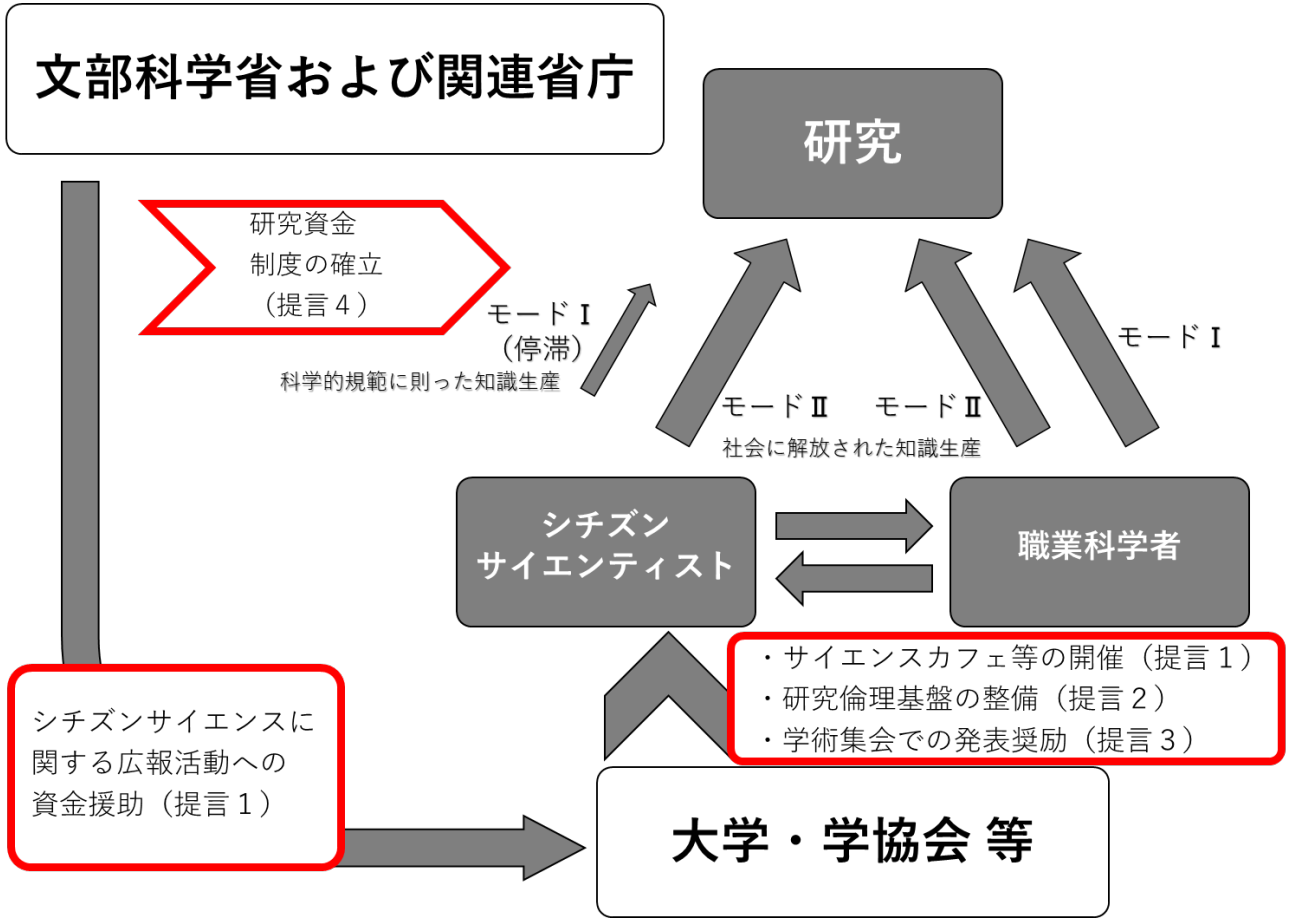
- 7割の団体で会員数が減少
- 2000名未満の団体で減少顕著
- 一部の大規模団体では大幅増

学協会連携分科会・男女共同参画分科会と連携し
活動実態に関するアンケート調査を実施中

資料②　シチズンサイエンスに関する提言案の提出

24期の若手アカデミーを中心とする審議・シンポジウム・ワークショップ、その他調査を踏まえて、我が国におけるシチズンサイエンス推進の現状と問題点を抽出し、以下に示す４つの提言をしている。

(1)シチズンサイエンスの知識生産活動への拡大に向けた広報活動
(2)シチズンサイエンスの研究倫理を保持する基盤整備
(3)シチズンサイエンスを推進するための社会連携の基盤整備
(4)シチズンサイエンティストの活動を支援する研究資金制度の確立



資料③　地方における若手科学者を中心とした学術活動の活性化

（内閣府日本学術会議）

事業概要・目的

現状と課題

○若手アカデミーの科学者の多くは地方課題の認識、地方との交流が不足しており、地方の若手科学者は、学術界の最新動向に接する機会が不足している。
○若手科学者が学際交流等で刺激を得て、革新的な研究テーマやアイディアを創出していくとともに、若手アカデミーが「若手の代表」として提言を表明することが重要。

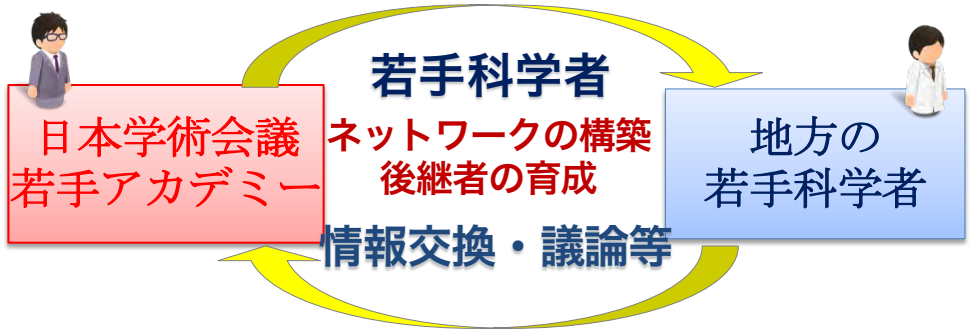
日本学術会議若手アカデミーの活動
（日本で唯一の学際的なアカデミー）

課題解決への取組

○若手アカデミーと地方在住の若手科学者との情報交換・議論を展開。また、地方の産業界・メディア・市民等を交え、今後の若手科学者・若手アカデミーの在り方を議論。

事業イメージ・具体例

地方においてワークショップを開催



○地方経済界、地方メディアと連携
　課題把握、情報発信

○国際比較による議論
　現状認識・知見等共有

○市民参加型の自由討議
　社会との対話・発信

期待される効果

○若手科学者や地域社会等の意見を取り入れた若手アカデミーの提言の質の向上
○国内外の若手科学者間のネットワーク構築によるアイディアの共有やイノベーションの創出
○社会との対話による地方における様々な課題の解決に向けた提案や科学リテラシーの普及・啓発

公開ワークショップ

大学の国際化による地方活性化促進：地方拠点としての大学の在り方を考える

左より中澤会員、文部科学省佐藤氏、立命館アジア太平洋大学ライラニ氏、別府市大塚氏、ボランティア梶原氏、中西会員が登壇

岸村代表の冒頭挨拶

令和2年1月23日、若手アカデミー主催、別府市後援による公開ワークショップを開催し、大学や研究機関の国際化について、別府市の地方活性化につながった事例を元にディスカッションを行いました。オンライン配信を行い、合計124名の参加がありました。国のレベルから学生支援まで幅広い視点からのディスカッションが好評でした。

今井絵理子大臣政務官のビデオメッセージ

＊「学術の動向」2020年８月号にフォローアップの座談会を掲載予定。

公開ワークショップ
「公民学連携による地域将来像の構想：豊橋の未来をデザインする100人ワークショップ」
（令和２年７月１１日、豊橋）

地域社会の中での大学・学術の役割や、地域における多主体連携・共創のあり方を地域社会に生きる若手の実践者（市民、企業人、行政官など）と考え、地域の将来像を考えていくことをテーマに企画。

新型コロナウイルス感染症の影響で、開催見合わせ（年度内の実施を検討中）

２４期に行った地方活性化活動を振り返りつつ、「学術の動向」で特集号を企画（2020年８月号掲載予定）。
『若手科学者が考える「地域社会」と「科学」の幸せな関係』と題して、24期のまとめの論考を行うとともに、25期の活動指針を得る機会とした。

豊橋WS実施後に特集を出版する予定だったが、先行して特集を出すこととし、WS記事に代えて『ポストコロナ時代を展望した地域社会と科学の関係：わたしたちはいま何を考え、この時代にどう向き合おうとしているのか』と題する若手による座談会記事を掲載。

国際的活動（主に国際分科会）

実施日	名称	内容、成果など
2019. 10/2-4	筑波会議	若手アカデミーが協力機関として参画し、GYAとも連携して複数のセッションを企画・運営。
10/5	10th EU-Japan Science Policy Forum （京都）	若手アカデミーを代表して、新福副代表が参加。
10/5-8	STS Forum Annual Meeting 2019（京都）	安田メンバーをFuture Leaders Programに派遣。また、新福副代表がAnnual Meeting内で講演。
11/19-23	World Science Forum 2019 (ブダペスト)	岸村、馬奈木、安田が代表派遣で参加。日学主催のサイドイベントを運営。
2020. 2/11	国連5th International Day of Women and Girls in Science（ニューヨーク）	新福副代表が講演。
４–５月	Gサイエンス学術会議2020	中村、岩崎、森が提言の作成に関与。新福はGYA側代表として参加。
6/8-12	国際代表派遣・GYA annual general meeting（オンライン）	GYAの年次総会に若手アカデミーメンバーが参加（岸村、新福、岩崎、住井、安田）。厳しいセレクションを乗り越え、安田連携会員が本年より新メンバーとして加入。**新福副代表が、三度、執行役員に選出された。**
6月	INAS (Indian Academy of Sciences) Science Leadership Workshop	新福副代表がオンラインで講演。

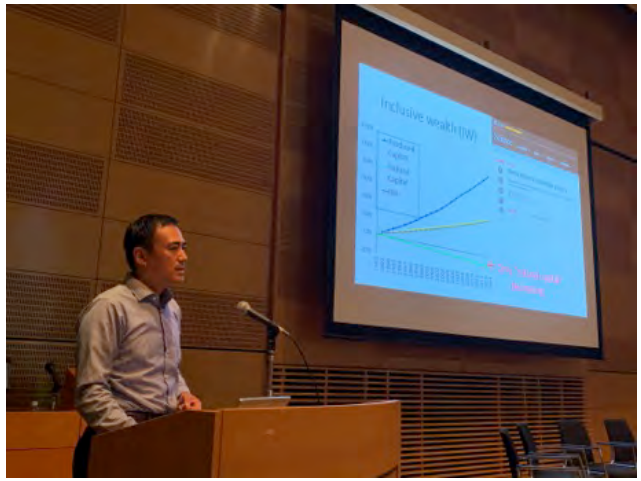
筑波会議2019

若手アカデミー、グローバルヤングアカデミー、江崎玲於奈先生、John Earnest Walker先生、山中伸弥先生、小林誠先生

2019年10月2-4日、若手アカデミー（YAJ）とグローバルヤングアカデミー（GYA）が協力し、筑波会議のセッションを企画・登壇しました。プレナリーセッションではノーベル賞受賞者と「若手科学者が本当に成功するには」というテーマで議論しました。

岸村代表の冒頭挨拶

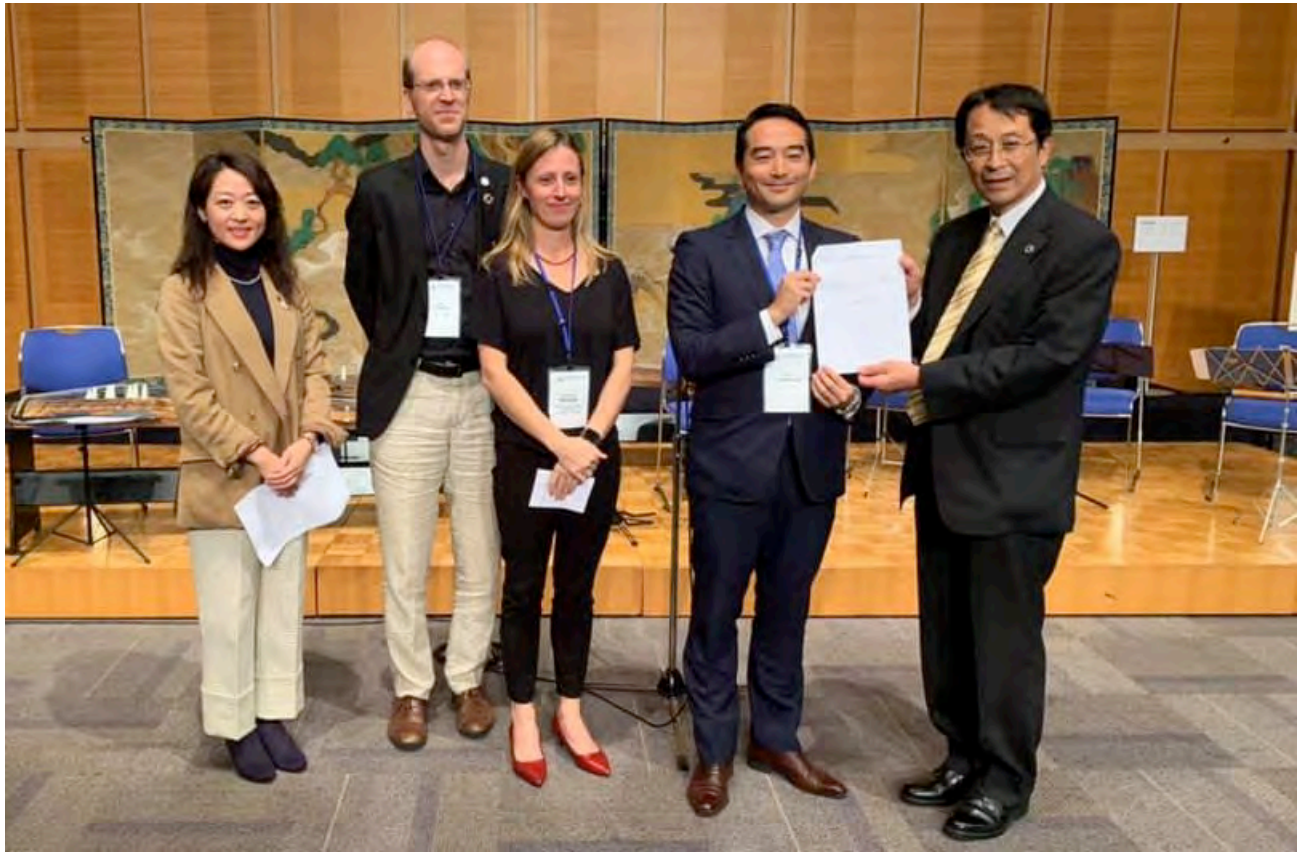
岩崎幹事と新福副代表がモデレーターを務めました



SDGsと科学的助言のセッションでは、岸村代表、安田会員、馬奈木会員がGYAメンバーと科学に基づいた市民や社会への助言、科学への信頼について議論しました。

市民公開企画では、Gサイエンス会合でも取り上げられたシチズンサイエンスをG7若手アカデミーメンバーや参加者と議論しました。

Slidoで参加を促す西嶋会員



最終日には、新福副代表がGYAのKoen Vermeir共同代表、Karly Kehoe氏、五十嵐立青つくば市長と「筑波宣言」にサインしました。

産経新聞に掲載

筑波会議「政策決定者らと議論 有益な機会」

新福洋子准教授

開会式で落合陽一氏と

UNDP Pedro Conceicao氏との会合

資料④-2

World Science Forum 2019

参加報告(2019年11月20-23日＠ハンガリー学術会議)
国際代表派遣：岸村　安田　馬奈木

20-22日の会場となった
ハンガリー学術会議

ユネスコUNESCO、国際科学会議ISC,　ハンガリー学術会議、AAAS、世界学術会議(The World Academy of Science), IAP (the Inter Academy Partnership)、EASACとの提携により、ハンガリーブダペストで開催。

WSF:1999年にブダペストで開催された世界科学者会議にはじまり、2003年以来、2年に1度のイベントとして、科学者、政策者、産業会のリーダー、一般市民、メディアなどが集まり、世界的な問題について、科学の果たす役割を議論する場として機能。

23日の会場となった
ハンガリー国会議事堂

11月20日にＳＣＪとＹＡＪの共同開催として
Implementation of the S20 Recommendations: Scientific Solution to Keep a Balance Between Promotion of Industrial Science and Warning from Environmental Science? のセッションを開催。日本から武内副会長がS20日本2019の提言について説明、その後、ＹＡＪから岸村、安田が、そしてGloal Young Academy (GYA) から Dr. Michael Saliba 、Dr. Wibool Piyawattanamethaがそれぞれの立場から発表した。主に海洋プラスチック汚染の問題について、プラスチック産業や社会との関係、科学者の立場からすると一見摩擦になりえるＳＤＧｓについてどう乗り越えるべきか、新テクノロジーの社会実装についてどう進めるか、などについて議論しました。最終的に馬奈木が全体を振り返りつつ提案を行った上で質疑を行い、今後の方向性をまとめました。

まとめ

・科学技術のみないし規制のみで問題は解決しない
・産業界にインセンティブを付けて至上をうまく利用する形で問題解決に向かわせる必要がある
・科学的な厳密性・誠実性がサイエンスアドバイスには最も重要。
・特に環境データに関しては、完全なデータor不完全なデータ、ではなく、不完全なデータorまったくデータがない状況である一方、早急なアクションが必要である。語弊なく危険性（現データから考えられる最悪のシナリオ）までを伝えるデータの取得が急務・必要性がある。
・民間と公共機関の両方でＲ＆Ｄを。

今後の方向性

未知の脅威もあることから,早めの政策措置が急務
-民間 R&D 税の減額; 公的 R&D サポートの増強
-指標化の重要性 (SDGs を個人的な責務へ)
-社会に関連ある科学調査委員会を作る必要性
-行動規範と倫理規範を促進し、価値観と行動を変える必要性
代替となるエコなプラスチックを利益が上がるように
-市民とコミュニケーション容易なシンプルな基盤を作る
S20 to G20, then next to 2020 S20/G20

資料④-3

令和2年4月1日発行（毎月1回1日発行）学術の動向 第25巻第4号 通巻第289号 ISSN 1342-3363

【特集1】
若手科学者が担う国際的なリーダーシップ
新福洋子／岩崎 渉／Koen Vermeir／岸村顕広／中村征樹／S. Karly Kehoe／Michael Saliba／Filippo Rossi／Tyrone Grandison ／中西和嘉／Patricia Silveyra／西嶋一欽／田中和哉

【特集2】
若手科学者が考えるSDGsと科学的助言
新福洋子／狩野光伸／安田仁奈／若松美保子・馬奈木俊介／Wibool Piyawattanametha／藤井雅利・中澤拓也

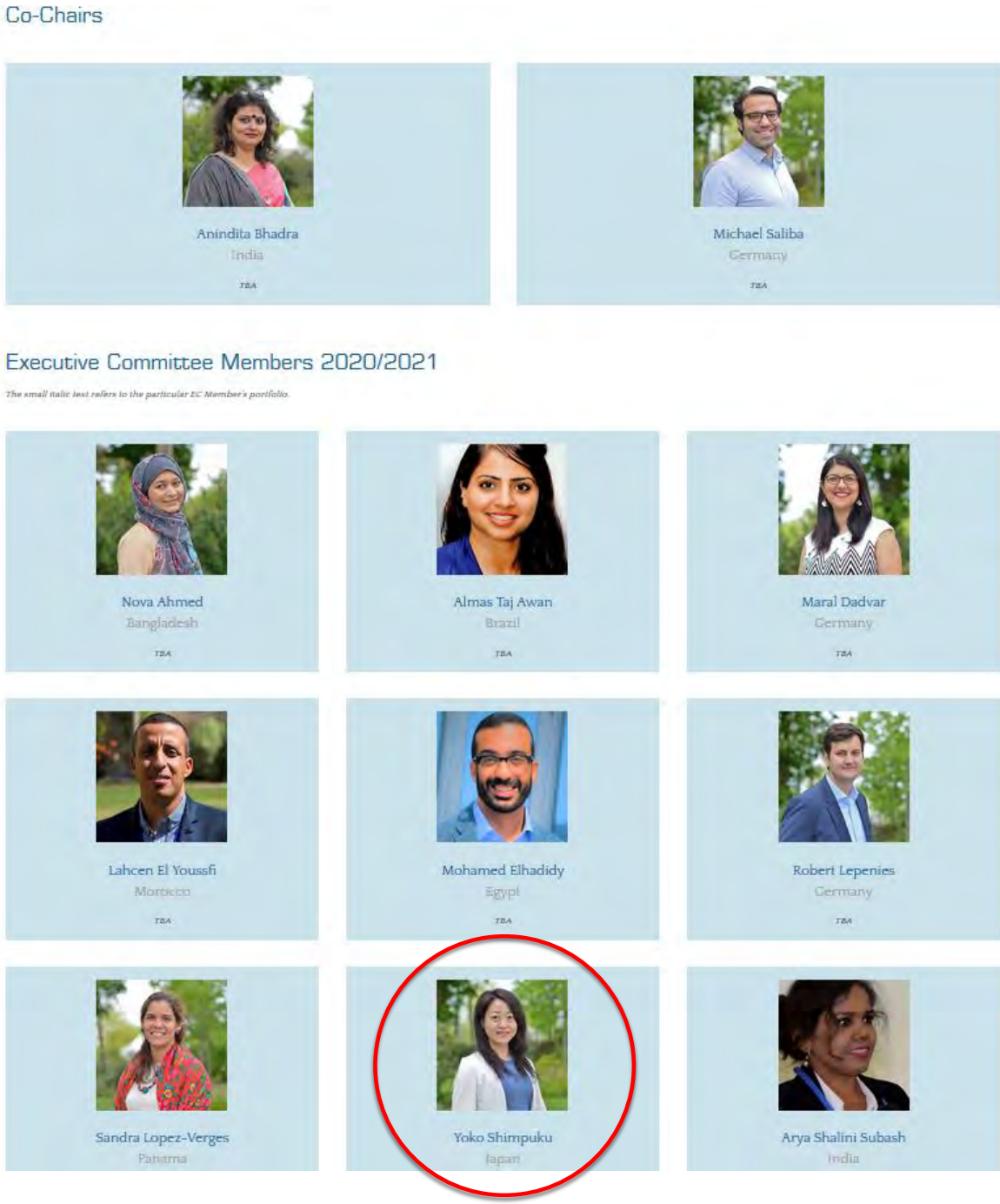
「学術の動向」2020年4月号特集１＆２：

筑波会議をメインに、WSFなど関連するイベントの内容をまとめる形で、日本学術会議若手アカデミーが国際的リーダーシップを執る特集号を企画し、さらに議論を深化させた。

GYA AGM 2020（オンライン開催）

新福副代表が、三度、執行役員に選出され、次年度、日本において開催予定のGYA年次総会兼学会2021の企画・運営を牽引。

➡25期においても、日本学術会議若手アカデミーが積極的にイニシアチブを執る機会とする。



その他の動き

実施日	項目名	内容、成果など
2019. 12/10	竹本内閣府特命担当大臣訪問	竹本内閣府特命担当大臣と「研究力強化・若手研究者支援総合パッケージ（仮）」についての若手との意見交換の場に若手アカデミーから、小野、川口、新福の３名が出席。
12/15	NHK「日曜討論」出演	「吉野さん ノーベル賞受賞 どうするニッポンの科学技術」と題するテーマで、岸村代表が若手研究者を代表して議論に参加。
12/26	今井政務官訪問	今井政務官と若手研究者、若手政治家としてどのような建設的な連携ができるかを意見交換。運営分科会メンバーが参加。
12/26	GRIPSシンポジウム「我が国科学技術の失速の原因と復活の処方箋」	岸村代表がセッション３「科学技術政策にかかわる議論の場の設定」で話題提供。田中特任連携会員が全体の運営を担当。
2020. 1/23	公開ワークショップ「大学の国際化による地方活性化促進：地域拠点としての大学の在り方を考える」	別府市の後援を得て開催。大学や研究機関の国際化について、別府市の地方活性化につながった事例を元にディスカッションを行った。オンライン配信を行い、合計124名の参加があった。国のレベルから学生支援まで幅広い視点からのディスカッション好評を博した。今井政務官からビデオメッセージも戴いた。
1/24	若手アカデミー全体会議	各分科会も同時に開催し、今後の活動について議論した。内閣府CSTIの上席科学技術政策フェローである江端新吾氏がオブザーバー参加する中で、議論を深めた。散会後、有志による研究交流会を実施した。
3月前半	「若手アカデミーメンバーの推薦図書」を公表	休校になった小中高生向けに、メンバーの思いの詰まった良書を推薦してもらい、公表した。

-文科省と意見交換を実施（創発研究など）。コロナの影響に関する若手の意見を提出（５月）。
-文科省・科学技術社会連携委員会に有識者として参加し、シチズンサイエンスに関する話題提供と意見交換を実施（2020年2月4日）
-CSTI基本計画専門調査会へ有識者として参加（岸村代表、岩崎幹事、2020年７月１日）

竹本大臣との意見交換会

2019年12月10日、竹本内閣府特命担当大臣と「研究力強化・若手研究者支援総合パッケージ（仮）」についての意見交換の場に小野、川口、新福の３名が出席しました。

今井政務官との意見交換会

2019年12月26日、今井政務官と若手研究者、若手政治家としてどのような建設的な連携ができるか意見交換を行いました。運営分科会メンバーが参加しました。

主な活動予定(2020年9月まで)

予定日	名称	予定される内容
4月	『学術の動向』4月号特集	特集１『若手科学者が担う国際的なリーダーシップ』、特集2『若手科学者が考えるSDGsと科学的助言』
7/8	地方学術会議委員会	岸村代表が委員に就任し、議論に参加。
7/25	公開WEBシンポジウム「シチズンサイエンス・当事者研究が拓く次世代の科学：新しい世界線の開拓」	オンライン開催。当事者研究の視点を組み入れることで、シチズンサイエンスのさらなる拡充を試み、競争的サイエンスから共創的サイエンスへの移行や「分断された知」の架橋について議論する。
８月	『学術の動向』８月号特集	特集『若手科学者が考える「地域社会」と「科学」の幸せな関係』を担当。
９月予定	全体会議	２４期の振り返りと、２５期に向けた議論。

- 2021年５月に、GYAの年次総会＋学会を日本で開催する予定があることから、２５期立ち上げと同時にスピーディーに活動できるよう配慮しつつ活動を進める。

ご高覧いただき
ありがとうございました。

２４期活動を支えていただいた先生方、
特に、若手アカデミー担当の三成副会長、
および、
山極会長、渡辺副会長、武内副会長に
厚く御礼申し上げます。